

2006年12月15日

ユニセフ＊コープ ネットワーク

# ほむ・ほむ通信

No. **34**

## ラオス スタディツアー PHOTO REPORT

2006年11月12日(日)～11月19日(日)まで、関西・中四国18生協の指定募金先であるラオスを視察しました。視察先はラオス南部のサラワン県とサバナケット県。指定募金の成果や、ラオスの現状とユニセフの活動について確認してきました。そのときの様子を写真でご報告します。



### 保健指導

ユニセフの支援を受けているケンマンラオ村にて。ユニセフの支援で、移動保健チームが3ヶ月に1回、村を訪問し、村人へ育児・保健についての研修を実施しています。保健・衛生の知識が増え、今では下痢などの病気も少なくなりました。



### 体重測定

研修後、小さい子どもを対象に体重測定を行います。もし、発育に関して問題や母親が悩みを抱えていれば、保健員がアドバイスを行います。



### 予防接種

7つの病気（はしか、ポリオ、ジフテリア、百日咳、破傷風、結核、B型肝炎）に対する拡大予防接種プログラムがユニセフの支援で行われています。この子はポリオの予防接種を受けていました。又、同時にビタミンAの錠剤も提供していました。



### HIV/エイズ研修

視察日には、この村で3回目となる HIV/エイズフォローアップ研修も行われていました。「どんな人が感染の危険性が高いとおもいますか？」というクイズ形式の研修のほか、コンドームを使用したゲームを取り入れ、病気に対する知識や予防法をわかりやすく伝えています。ユニセフは指導員の研修や教材開発を支援しています。



## ユニセフ ラオスタディツアー PHOTO REPORT



### 人身売買を防ぐために

ラオスではタイ等への人身売買が後を絶ちません。ユニセフとラオス労働福祉省は、人身売買の危険性を訴える看板を国境近くの都市の市場等 5 箇所に設置しています。看板には「よく考えて、安全な人生を」と書かれています。



### 人身売買の実情

この家に住む16歳と19歳の女性2人は人身売買の犠牲となりました。果物売りの仕事があるという話でタイへ出稼ぎに出た彼女達は、実際はタイ人の家庭に買われ、その後売春宿に連れていかれました。半年後、タイ警察に保護され、ラオスに戻ることができました。



### 学校での衛生教育

ユニセフが支援する「子どもにやさしい学校」では、ユニセフが開発した教材を使って衛生教育が行われていました。「トイレの使い方」「手を洗おう」などをテーマにした紙芝居にみんな熱心に見入っています。



### 未支援の村の実情

支援をまだ受けていない人口約250人のナーボ村で村人に実情をインタビューしました。村では、学校に通っていない女の子も多く、女性はほぼ全員が読み書きができません。成人まで生きる子どもは半数位でした。昨年は出産時に2人が亡くなりました。エイズもどんな病気かは知りません。

### ラオスの代表的なお料理 ラープ・ムウ

<材料(2人分)>

豚挽き肉 150グラム

米 大匙1

たまねぎ 1/4

香草(パクチ 万能ねぎ など適宜)

あわせ調味料(酒大1 砂糖小1/2 ナンプラー)

唐辛子

ライムまたはレモン汁 大2

- ☆ 米をきつね色になるまで炒り、すり鉢で粉になる寸前まで碎く
- ☆ ひき肉 みじん切りの玉ねぎをいため、あわせ調味料で味を整える(ナンプラーはお好みで調整してください)
- ☆ 米 ひき肉 香草 唐辛子 レモン汁を まぜあわせる。蒸したもち米、生野菜などと一緒に・・・



ラオスでのお食事

2005年10月から5ヵ年の計画で始まった今回のキャンペーンは、エイズが子どもに与える影響が軽視されている現実に対して警鐘を鳴らすことを目的としています。キャンペーンは子どもたちをHIV/エイズの脅威から守り、HIV/エイズの更なる流行を食い止めるために必要な資金集め、政策提言及び、持続可能な対策プログラムを促進しています。ユニセフはUNAIDSと共にキャンペーンの中心的な役割を担い、政府、NGO、大学、宗教団体、スポーツ組織などのあらゆる団体と協力して、キャンペーンを遂行しています。今回はこのキャンペーンの4つの目標と、それに関連した現地でのユニセフの活動をご紹介します。（日本ユニセフ協会インターン 福田）

### ○ユニセフ「子どもとエイズ」世界キャンペーン目標

このキャンペーンでは、2010年までの5年間で達成しようとしている4つの目標があります。

#### ①母子感染の予防

エイズに苦しむ子ども達の多くは、母親の胎内にいるとき、または出生時にHIVに感染しています。母子感染の予防手段がとられない場合、HIV陽性の女性から生まれる子どもは、35%の確率でHIVウィルスに感染する可能性があると言われています。欧米では、予防手段の普及により、幼い子どものHIV感染をほぼゼロまで減らすことに成功しています。

現状：母子感染のリスクをもつ女性のうち、母子感染を防ぐための治療を受けられるのは、**10%未満**

目標：2010年までに、母子感染予防サービスを必要としている女性の**80%**に提供する

#### ②HIVに感染した子どもの治療

抗ウイルス薬を使った大人のHIV感染者への治療が普及する一方で、子どものHIV感染者への治療はなかなか普及しません。また、HIVにより抵抗力が低下することで感染のリスクが高まる日和見感染症から子どもたちを守るためには、感染症予防薬による治療が必要です。

現状：HIVに感染している子どものうち、抗ウイルス薬による治療を受けられるのは、**5%未満**。感染症予防薬による治療を受けられるのは、**1%未満**。

目標：2010年までに、抗ウイルス薬治療、感染症予防薬による治療を必要とする子どもの**80%**に提供する

#### ③若者の新たな感染の予防

HIV/エイズに関する正しい知識の欠如は、若者の間でHIVの感染が広がる大きな原因のひとつとなっています。ユニセフは、教育やメディアを通してのHIV/エイズに関する情報提供、学んだ知識を行動に反映させるための判断能力の育成（ライフスキル教育）、HIV検査・カウンセリングの実施、性感染症治療の提供などを含む若者が利用しやすい保健サービスの整備などの活動を通して、若者の新たな感染を予防しようとしています。

現状：2004年、新たに**200万人**以上の15～24歳の若者がHIVに感染。

目標：2010年までに、HIV/エイズと共に生きる若者を**25%減らす**

#### ④HIVにより困難な状況にある子どもの保護

エイズによって親を失った孤児たちは、親を失ったことで、保護された安全な生活を奪われるだけでなく、偏見や差別、生活のための労働、兄弟の面倒をみるための教育の中断など、様々な困難に直面しています。

現状：孤児などHIVの流行によって影響を受け保護の必要な子どものうち、公的支援を受けているのは、**10%未満**。

目標：2010年までもっとも困難な状況に置かれる子どもたちの**80%**に支援を提供する。



## ○現地でのユニセフの活動事例～キャンペーン目標達成に向けて

4つの目標を2010年までに達成するために、ユニセフは様々な支援プログラムを実施しています。ここではその一例をご紹介します。

### 母子感染の防止のための活動～ミャンマー

ミャンマーでのHIVの母子感染を防ぐために、ユニセフは次のような活動を行っています。

#### －妊産婦・女性へのHIV感染予防・早期発見・治療支援

- ・妊産婦への自発的なHIV検査とカウンセリング（VCT）の普及
- ・出産適齢期の女性への性教育

#### －医療関係者への母子感染予防のための研修

- ・助産婦や保健員を対象とした、安全な分娩や分娩時の注意を喚起するための研修
- ・HIVに感染している母親たちの子育てに関する個々のニーズにこたえるために、地方の保健員や助産婦、看護婦たちを対象とした乳幼児ケアについてのカウンセリング研修
- ・検査体制の改善のために、検査技師たちを対象としたHIV検査研修

#### －分娩を安全に行うための器具、HIV検査キット、実験設備、抗レトロウイルス薬などの提供

### 子どものHIV感染者の治療を支援～ハイチ

ハイチでは、ユニセフは子どものHIV感染者専用の治療設備を持っているゲスキオセンター（医療施設）の支援をしています。ここでは無料で、HIV検査、カウンセリングを提供しており、抗ウイルス薬の無料配布も行っています。

→（右）HIV検査を受ける子ども



© UNICEF video

### 若者の間でのHIV感染拡大の防止～モザンビーク



©UNICEF/HQ01-0150/Giacomo Pirozzi

モザンビークの若者の間でのHIV感染拡大に歯止めをかけるために、ユニセフは**若者が利用しやすい保健サービス**を提供できる施設、計40ヶ所に対して支援をしています。**アルト・マエ保健センター**もこのような施設のひとつです。ここでは、保健員が若者に対してわかりやすい言葉で性教育・エイズ教育、性感染症の治療、出産前後の妊産婦や新生児のケア、任意かつ他人に知られることなくできるHIV検査、**同世代の若者同士によるカウンセリング**が提供されています。2005年には、若者カウンセラーたちが、計10万回近くのカounselingを実施しました。

### HIV/エイズにより困難な状況にある子どもの保護～ボツワナ

ボツワナでは、**孤児を地域で支援する団体への支援**を行っています。支援を受けている団体のひとつBOCAIPは、親を失った子ども達が放課後に同世代の子どもと交流できる安全な場所を提供するために、**デイケアセンターを開設**しました。デイケアセンターでは、食べ物が提供され、子ども達はカウンセリングを受けたり、宿題を手伝ってもらったりできます。このようなセンターの開設で、孤児の扶養者達にもつかの間の安らぎの時間ができます。また、ユニセフはエイズ孤児の状況や政策の効果を測る際のモニタリングなど、**政府による孤児ケア施策の支援**も行っています。

#### ○募金でできるこんなこと

本世界キャンペーンのために必要な費用は5年間で、300億米ドルと見積もられています。ここでは、具体的にいくらで何ができるのかについて少しだけご紹介します。



109 円 HIV/エイズ簡易診断キット、1  
キット



21,800 円 子ども1人分の抗レトロウ  
イルス剤（液状）、1年分



1,199 円 子どもを持つ親1人分の抗  
レトロウイルス剤、1カ月分



10万9,000 円 子ども1人に対する抗  
レトロウイルス治療、5年分

「子どもとエイズ」世界キャンペーンの詳しい内容は日本ユニセフ協会ホームページをご覧ください。

<http://www.unicef.or.jp/campaign/051025/index.html>

UNITE FOR CHILDREN  UNITE AGAINST AIDS

## 秋田県のハンド・イン・ハンド募金を紹介します

10月21日、毎年恒例となった秋田県連主催のユニセフ街頭募金を行いました。

県連の会員生協と由利準備会から、約30名の組合員が秋田駅に集まり、4箇所に分かれてピエロの格好をしてアートバルーンも作って、それぞれ工夫を凝らしてユニセフハンドインハンド募金を呼びかけました。

みんなユニセフのイメージカラーのスカイブルーのスカーフ（マフラー）を巻き、ハンドインハンド募金のポスターと秋田県生協連のプラカードを準備し、ひと目でユニセフ募金を呼びかける団体であることが分かるよう演出しました。

募金終了後、昼食を食べながら募金の集約をして反省会を開きました。「ユニセフカラーのスカーフがとても良かった」「時期的にもやりやすく、昨年より人出が多いこともあり声がかけやすかった」「場所の選択が良かった」との意見が出されました。

約2時間の募金でしたが、61820円の温かい募金をいただくことができました。当日集められた募金は、生協大会で集めた募金（23891円）と合わせて、ユニセフ協会へ送金しました。



## コープえひめのもハンド・イン・ハンド募金が行われました

ハンドインハンド募金は、店舗・組合員交流会など14カ所で実施しました。店舗委員長さんへのお手紙作戦も実施！12月15日には、ユニセフ協会愛媛県支部設立発起人会といっしょに、松山駅前で行います。高校生や地元球団（愛媛マンダリンパイレーツ）の選手も参加する予定です。

## ユニセフやまがたのつどいが開催されました

「ユニセフ・やまがたのつどい」が、11月2日に開催され60名が参加しました。

はじめに伊藤寛山形県連会長が挨拶し、「世界の子どもたちも、自分たちの子どもとして考えてほしい」と呼びかけました。そして、ユニセフの県支部設立や、学校でのユニセフ活動再開に関わっていくことを今後の課題として提起しました。

次に、日本ユニセフ協会の林田佳子さんのリードで、「ユニセフすごろく」を使った学習を行いました。参加者を6つのチームにわけ、その代表者がコ



マになり、チーム対抗戦の形で進めました。一気にゴールする人もいれば、何回もサイコロの目が「1 もどる」をさしてしまう人もいて、何度も笑いと拍手に包まれました。マス目には、栄養や衛生、予防接種、教育支援といったユニセフの取り組みが書いてあるので、子どもの成長に大事なことがわかりやすく学習できると、大好評でした。

引き続き林田さんよりユニセフ活動について報告が行われ、初めての参加者が多かったので、大変興味深いものでした。特に、H I V/エイズ問題が、現在はより深刻さを増していることに、驚きの声があがりました。

午後からは、山形県連で取り組むネパール指定募金について学習しました。生協とユニセフ募金の関係やネパール指定募金、ネパールの状況などについて学習して、いわて生協で活動しているネパール出身の松原アンジュさんのメッセージも紹介されました。

今回のつどいでは、指定先のネパールを身近に親しんでもらおうと、ネパールの音楽を流し、ネパール紅茶を用意していましたが、最大の目玉は、お昼にふるまわれたネパールカレーです。このカレーは、米沢市在住でネパール出身のチャンダ・スレスタさんからレシピと本場のスパイスをいただき、身障者作業所「ぶどうの家」さんが調理したものです。香り・味ともに素晴らしいと好評でしたが、本当はレシピ通りだと辛すぎるので、かなりマイルドにしたそうです。なお、カレー代として1人500円を集め、経費を除いた収益はユニセフ募金としました。



☆ぼむぼむ通信の通算 34 号をお届けします。全国のユニセフ協力活動の交流誌としての役割はもちろん、世界の国々や子どもたちの様子も積極的に紹介していきます。

また、各地の活動の参考になるような取り組みのご案内も行っています。

☆全国の活動事例や、ぼむぼむ通信の感想・ご意見をぜひお寄せください。

☆次号は、3 月 15 日発行です。

お楽しみに！

## ぼむぼむ広場

ユニセフ＊コープネットワーク

ぼむ・ぼむ通信

No.34 2006 年 12 月 15 日発行

編集 グループ ぼむ・ぼむ

スタッフ・編集／尾澤・谷杉・浜崎・福本・藤森・

松本・山本・林田・北村

イラスト／蛭沢

発行 日本生協連 組合員活動部

〒150-8913

東京都渋谷区渋谷 3-29-8 コーププラザ 11F

TEL03-5778-8124 FAX03-5778-8125

ホームページ <http://www.jccu.coop/>